

平成二十七年・国指定重要民俗文化財

越中 哲也

長崎くんち 今年のみどり(其の二十八)

はじめに

昭和五十七年五月長崎歴史文化協会を十八銀行故清島頭取に創立して戴き、その機関紙として同年八月二十五日「ながさきの空」第一号を発行して戴いた。そして其の時の序文に頭取は次のように記しておられる。

長崎の街は我が国・近代文化の発祥の地として文化史上特別な地位を占め：そしてこの歴史と文化豊かな地域文化を研究し地域文化の向上に寄与したいという念願から長崎歴史文化協会を設立いたしました。：

翌五十八年九月、清島頭取より、「長崎くんちは長崎市民にとつても日本民俗文化史上においても重要な行事であるので、毎年長崎くんちの事について記録を残しておきなさい」との御依頼があり、私は「ながさきの空短信No.14」に「長崎くんち(その一)」を掲載して以来、今年で二十八回となる。



諏訪町傘鉾(昭和4年)

私に「長崎くんち」の事を先輩方より「まとめてみなさい」と言われたのは昭和三十年頃からであった。其の後、平成九年九月純心大学内に「長崎学研究所」が開設され、其の研究誌第七輯に私の論考『長崎文化考』(其の一)を御取り上げ戴いた。同書の序文に片岡前学長は次のように述べておられる。

長崎学研究にも新しい展開を考え、今回は民俗学の分野の論考を集めてみたいと考えた。長崎の民俗学の分野という長崎独特の

居町に其の社跡がある」と記してある資料がある。

諏訪社旧記の一つ「諏訪社由緒」に「諏訪社 今の諏訪町辺也」と記してある事と前記公文氏関係文書と一致するようである。

長崎くんちの始め

『鎮西大社明鑑』に諏訪社はじめの事として

賢清(青木氏)京都に登り則ち吉田兼英に調し免許を得て又長崎に帰りぬ、時に寛永元年(一六二四)七月也 尤も建立の始は九月九日神樂湯立斗り也

其の後、寛永十一年(一六三四)より九月七日より御遷宮の事はじまる。惣町より七町先供を相勤め諸芸を成す。午刻(正后)神輿渡御なる。長崎村の郷民これがかつぐ末刻(午后二時)御旅所に御着。八日御旅所に御遷留。九日十町先供を相勤。午刻神輿還御なるなりて本宮に遷座。これより湯立・神楽・流鏑馬等御祭礼の儀式のこりなく相調也。

この時、最初に踊を奉納したのが「音羽・高尾の二人の傾城・能をいたし始む」とある。当時の長崎の傾城町は、まだ丸山町寄合町がつくられる以前で当時の傾城町は古町・今博多・紙屋町方面にあつたとされ、この時の奉納踊が本踊という名称で現在も継承されている。そして高羽・音羽の生国は豊前中津の人で黒田家に従つていたと記してある。然し当時の黒田家は博多(福岡)にあつたので、之の二人も博多より来り、今博多町方面に住していたのであろう。そして、当時の奉納踊のことについて、青木永繁の『諏訪社実録』には次のように記してある。

奉納踊、曲舞または切、今にかく如し、是を小舞と云う。この小舞、今に絶る事なく出てこれを勤む

傘鉾のこと

長崎の傘鉾も博多方面より伝承されたもので其の原型としては『筑前名所図絵』に記されている松囃子図を参考にされるとよい。更に其の原型を訪ねると「京都祇園まつり」の山笠になると先輩方にお教えいただいた事がある。たしかに「長刀鉾」の型が原形であろうが、京都の鉾にも時代と共に大型になり囃子方が乗り込む「ダンジリ」と一緒にになり、現在は鉾も大きくなり、車がつけられている。然し其の上部の飾物だけは「カサゴコ」の面影を残している。

長崎の傘鉾も旧長崎市立博物館所蔵の「寛文長崎屏風」や富貴楼や歴史

年中行事として「長崎くんち」がある。：長崎文化の遠心的な広がりや影響力を考察してみたいと思つた。その様な視点から越中哲也氏が新聞・雑誌・機関紙等々に発表された論考を整理して刊行することにした。

註・『長崎文化考』は長崎純心大学博物館発行で販売書籍でないので公立図書館等を御利用下さい。

その『長崎文化考』(其の二)第三編に「長崎くんち考」をP. 46～P. 121という長文で、先輩方の論考を学びながら書いている。

『諏訪社関係資料』によると、太宰少貳藤原慶継二十六世の頃同家には青木氏と草野氏の両家があり、肥前松浦郡草野に住していた唐津の城主青木鎮永の三男として生れた賢清は「役小角」の修験道を修め神の如き人で、武力にも長れていたと記してある。其の後、佐賀扇町若宮神社に住し、長崎諏訪社の開基となり「大僧都金重院賢清法師」と記してある。

青木賢清が最初に長崎に来たのは元和元年(一六一五)であつたと言ふ。そして「元和九年(一六二三)、再び長崎に来たる」と記してある。それは公文九郎左エ門の招きによつたものであると記してある。その頃、公文氏は大窪山(今ノ長照寺右山手)に住していたという。この公文氏が奉祀していたのが諏訪大明神であつたと記してある。この公文氏は『天神利生記』によれば「天拝山の辺中原庄の地頭に公文外記左エ門猛虎(頭人也)」と記し『諏訪社重宝物帳』にも次のように記してあるので長崎の諏訪社は公文氏によつて伝承されたものと考ええる。

一、社職公文九郎左衛門 讓状一通 元和九年癸亥春二日賢清(青木)法印へ三所大明神を附与せし時の讓状也

これによつて長崎の諏訪社は青木賢清が奉祀したものでなく、公文氏によつて長崎の地に招祀された神社であつたと考ええると、博多の古文書に「長崎の諏訪社は博多土居町にあつた諏訪社を移したもので、今も土居文化博物館所蔵の「くんち屏風」に描かれている当時の「かさぼこ」は小型で上部の飾り物(長崎ではダシと云う)も簡単なものであつた事が理解される。

長崎の傘鉾が次第に大型化したのは一七五〇年頃からであらうと私は前述の『長崎くんち考』に記しているので、お読み下さるとよい。

長崎の傘鉾は実によく趣向されている。今年の新大工町の傘鉾の飾には「紅葉の下に鹿」が置かれていたり、新橋町の傘鉾の飾には「香炉に香合他」が配されている事、諏訪町の傘鉾の幕には「白狐」が長崎刺繍されている事等いろいろと考えさせるものがある。

奉納踊についても、それぞれの町内に由緒のあるものが趣向されていて色々と勉強させられる事があるし、今一つ「長崎くんち料理」も独特なものがある。その中の一つに「ザクロなます」があり、ドジョウ汁、さらさ汁、小豆ご飯等がある。また、「庭みせ」も忘れられない行事である。但し、この「庭みせ」の行事は明治以降に始まつたもので、其の昔は「庭おろし」といつた行事であつた事も学んでおかれるとよい。

尚、今年の長崎くんち案内誌としては例年の事ですが、山下寛一氏編集の『長崎くんち』(呂 紅刊)があるので御参考にしてくださるとよい。

風信

○夏休みを終え、九月より本会講座を左記の通り再開いたします。
一、毎週月曜十時半より長崎学講座 二、毎週水曜午後二時半より水曜懇話会。
三、十五日(火)二十九日(火)十時半より古文書を読む会。
四、十一日(金)二十五日(金)午後二時より長崎食文化サークル。
各講座共会費不要(資料代各自)。ご自由に御参加下さい。

○今月ご寄贈いただいた書籍

一、『光源寺ゆかりの人々 原爆・戦争・戦後それぞれの七十年』長崎光源寺ゆかりの人三十二人の寄稿集。戦後七〇年、本当に良い本でした。涙しました。(堀田武弘編集・光源寺刊)読書希望の人は長崎の光源寺まで。

一、『小曾根乾堂 謎ときの旅』文中に「乾堂は日記も手紙もほとんど残していない」と著者は記しておられる。それにしても今回の乾堂史は良くまとめられた書物でした。大いに参考になりました。(小曾根吉郎・育代編述)長崎新聞社刊。(二千円+税)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 二F

